

416
71



天竺藝術目次

一	アヒサトリカアナヤアカ 暴風の夜に愛するものを求む	ラジャシタニ
二	青い顔の女と花鳥及び雨雲と稻妻 (電光)	十六世紀中頃
三	雨宿り	十八世紀の初期
四	ヘラゲニ連台に座すビーナアに對して歌ひ孔雀は音樂に伴れて舞ふ鹿は是れを聴く太鼓とシンバルスの合奏	十六世紀
五	蓮華に座する女神を拜するブラマ教徒	十七八世紀
六	彩色せる舞踏者の画像	十八世紀
七	舞踏伴奏の歌手とサライギ演奏	ラジャシタニ派
八	木の葉を裳とせる女	ラジャシタニ
九	ゴハーダーナザンの傍にある画の部分	ラジャシタニ派
十	水を求むる象	ラジャシタニ
十一	戀人を待つ女	ラジャシタニ
十二	區劃せる花園に立てる女	ラジャシタニ
十三	西の断片人と孔雀	ラジャシタニ
十四	女と少さいタンピウラと孔雀	ラジャシタニ
十五	經文の説明文	ラジャシタニ
十六	滿開せる花木に寄り左手を揚げる女	ラジャシタニ
十七	戦争する熊と猿	ラジャシタニ
十八	戦ふ鹿	ラジャシタニ
十九	笛を持つるクリシュナ	ラジャシタニ
二十	シダーマを歓迎せんとして立てるスライタクリシュナ	ラジャシタニ
二十一	蓮華に座せるクリシュナとラダー	ラジャシタニ
二十二	笛を持つるクリシュナ	ラジャシタニ
二十三	蓮華に立つクリシュナ	ラジャシタニ
二十四	浴後の貴婦人	ラジャシタニ
二十五	クリシュナの遊戯	ラジャシタニ
二十六	ラアダと侍女	ラジャシタニ
二十七	戀の結び	ラジャシタニ
二十八	ビールス夜鹿を狩る	ラジャシタニ
二十九	狩りより歸り来るラクスマナ	ラジャシタニ
三十	スリクリシュナとラハダ	ラジャシタニ
三十一	スリクリシュナ乳を搾る	ラジャシタニ
三十二	神の牛群	ラジャシタニ
三十三	クリシュナラーダの後を追ふ	ラジャシタニ
三十四	戀人を待つ女 愛撫の鹿	ラジャシタニ
三十五	カアリヤの勝利 ラアスリーラ合唱	ラジャシタニ
三十六	笛を持つるスリクリシュナ	ラジャシタニ
三十七	スリクリシュナに食を奉るマシユウラブラマの妻等	ラジャシタニ
三十八	輿に乗れるダマヤンチ	ラジャシタニ
三十九	ハアバアチ 結婚式	ラジャシタニ
四十	木の實を暴食するマハデバとバアバチ	ラジャシタニ
四十一	カアリの死化粧	ラジャシタニ
四十二	ラアダの化粧	ラジャシタニ
四十三	愛撫の鹿 風暴	ラジャシタニ
四十四	暴風を浸して戀人に密會せんとする女	ラジャシタニ
四十五	暗を浸して戀人に密會せんとする女	ラジャシタニ
四十六	クリシュナの使を貶ぐるマニニ	ラジャシタニ
四十七	内氣の花嫁	ラジャシタニ

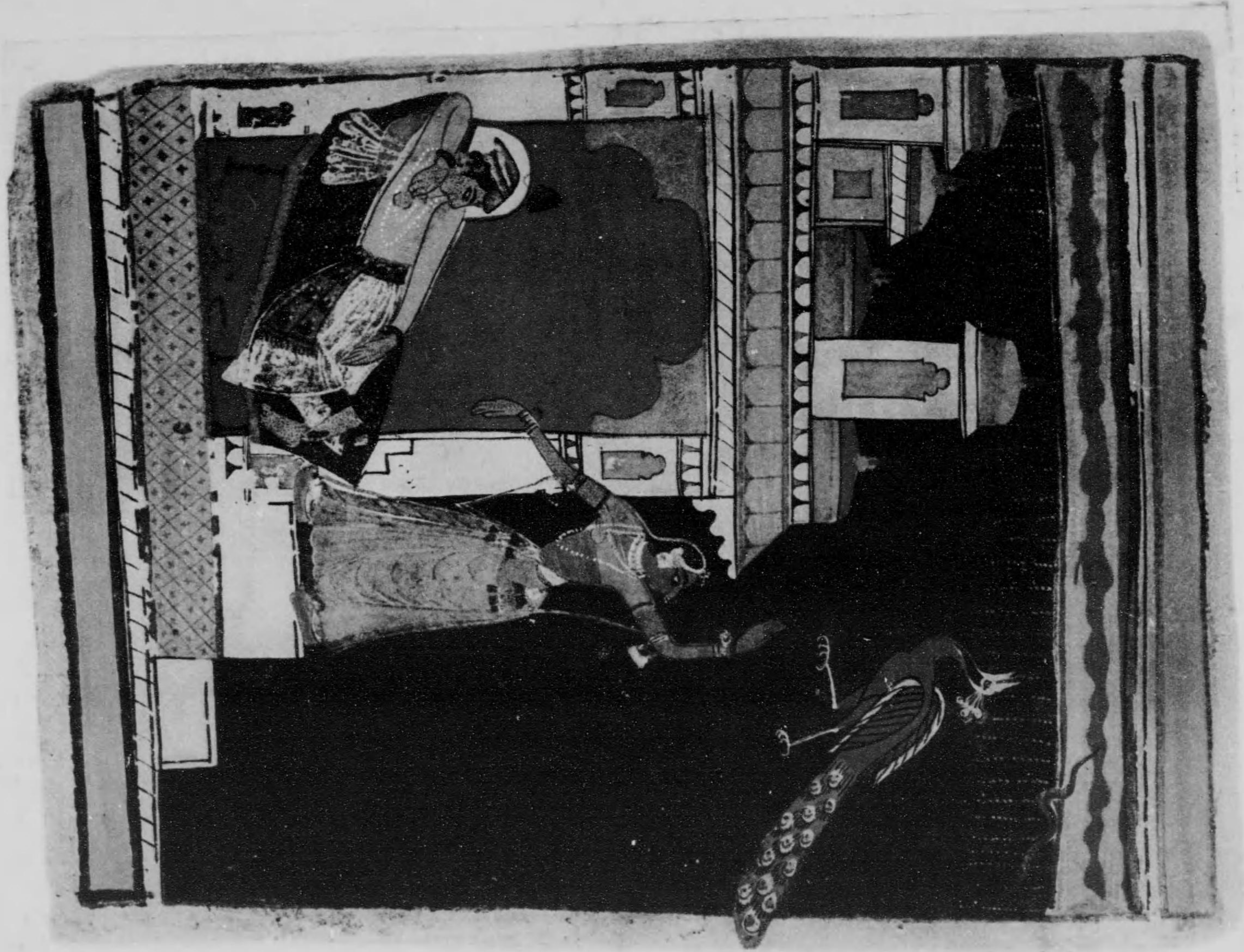
416-71

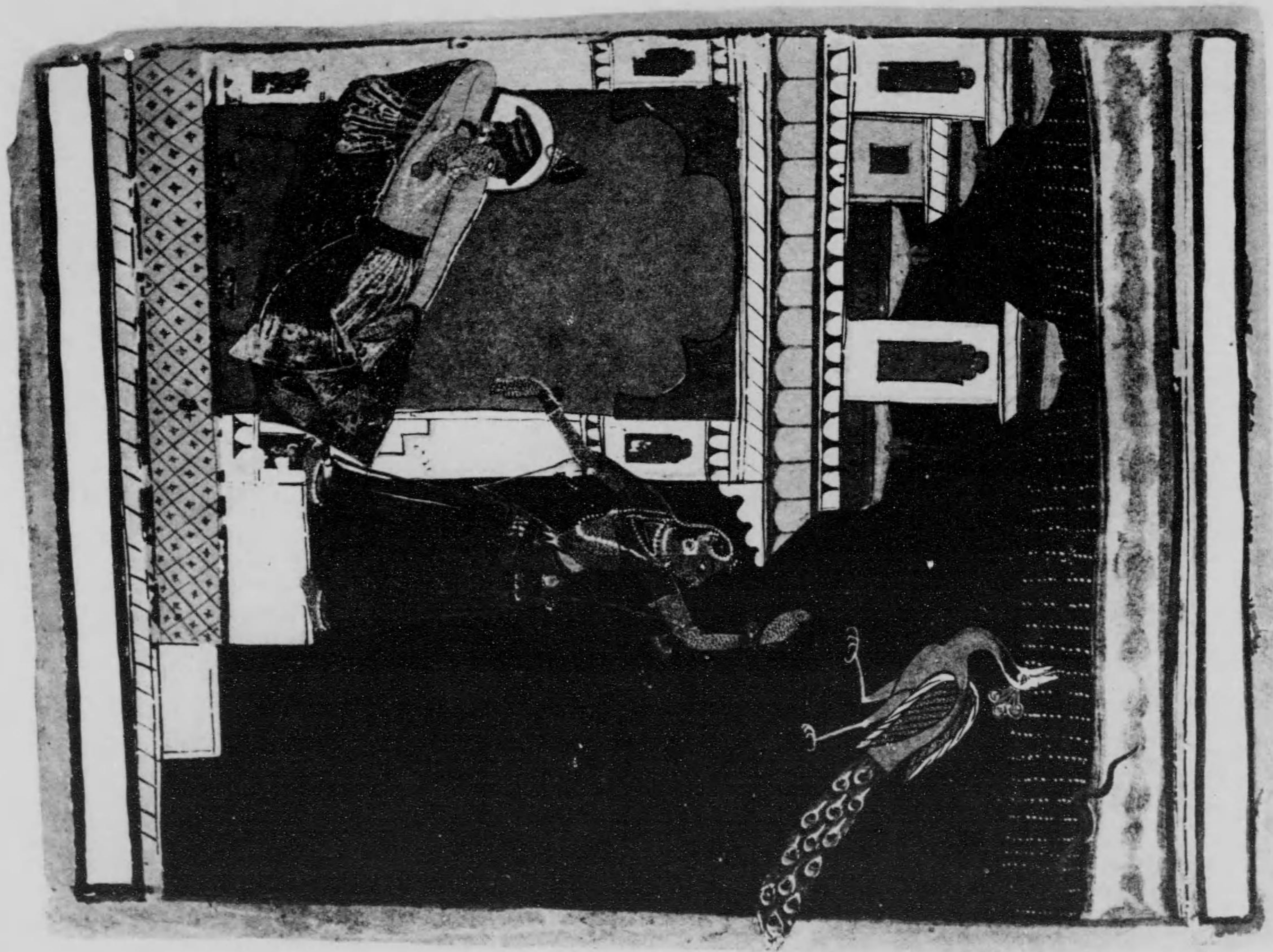


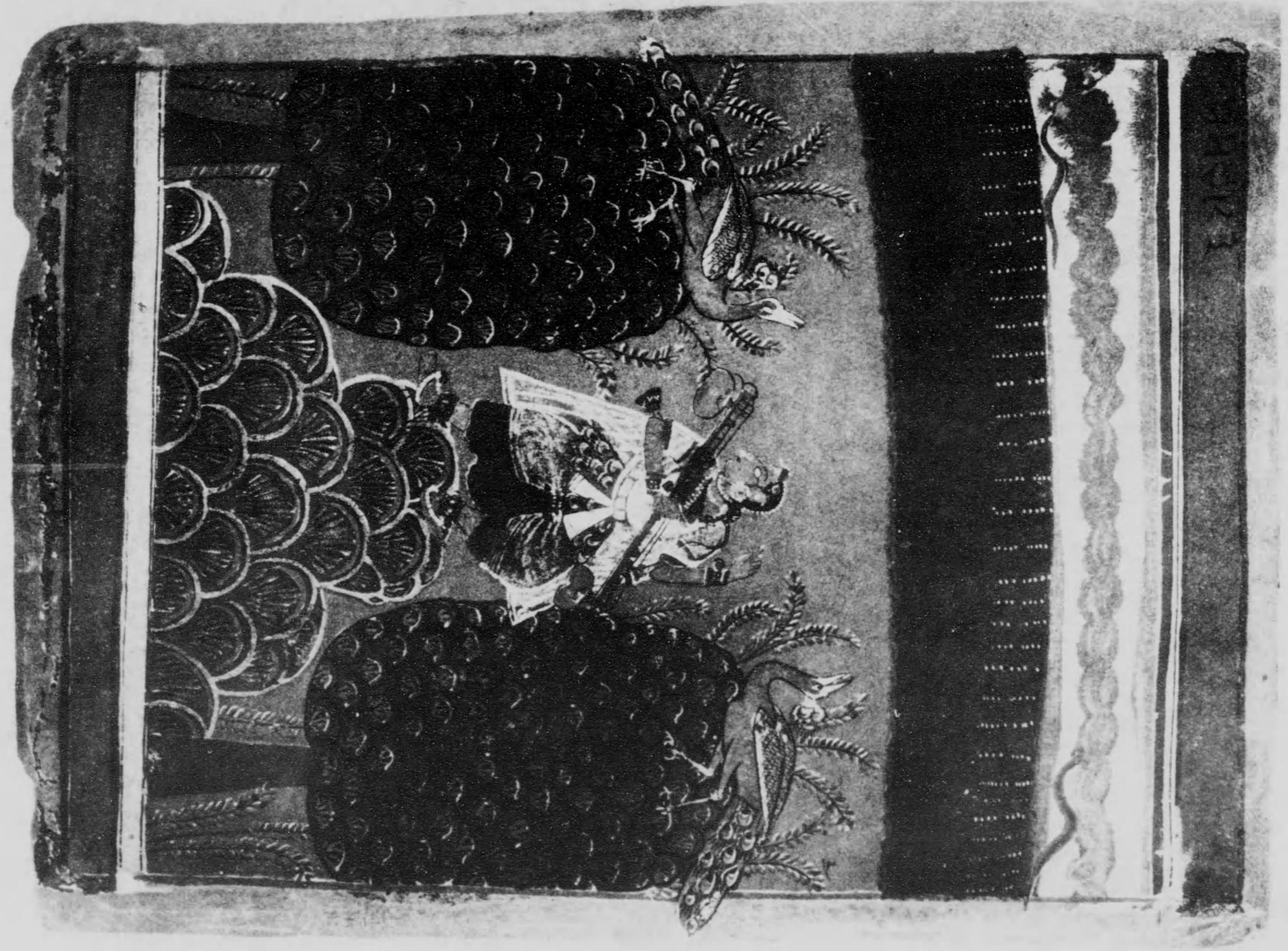
曩に中央亞細亞の藝術を紹介しました縁に因つて茲に北方印度地方の藝術を紹介すること
 いたしました。これは先に刊行の中央亞細亞の藝術よりは少し時代は新しく十六世紀か
 ら十九世紀に亘るものであります。それは英吉利の印度征服の前後でありまして、當時印度
 の北方に位し、東はヒマラヤ山脈を帯びてベンガルに界し。西はインダス河を以てアフガ
 ニスタンと界し、北にはバンデヤツブ地方を扣へて國を建てたモーグル帝國ラヂユブタナ。
 ルツクナウ等がありました。此の画集は即ち此等の地方に産れたるものであります。この地
 方は往昔支那から印度に旅行する通路に當る所で、かの西遊記で有名な唐の玄奘三藏が佛
 經を天竺に索めた時なども此の地方を通過したものだと言はれます。而してこ
 の画集に輯めた画の産れた時代即ち十七、八世紀頃には此の地方は印度のヴェダ教及回教
 に反抗して、劍の力に頼つて唯一神の王國を建てんとしたシーク教徒の興起、それに續い
 てナディールシアアの來襲、其後アフガニスタンと南印度なるマラータ國との爭奪的とな
 るなどの波瀾ある歴史を有してゐるのであります。しかも此の画集に依つてこの時代、
 この地方に於ける藝術に接してむしろこの社會的混亂國外別乾坤的の表現を成して這個の
 常に美しき幻想的な印度風の氣分に恍惚たるを覺ゆるものは實に私一個のみではありませ
 ない。若し夫れ技巧上の様式に就いて之を観るならば、先に刊行しました中亞細亞の藝術と
 共通する点が多く、這樣的技巧様式が同一系統のものとして印度希臘式から出發して歐州
 ルネサンス以降の風潮に浴し這等地方特有の藝風を成したやうな痕を見る事ができます。

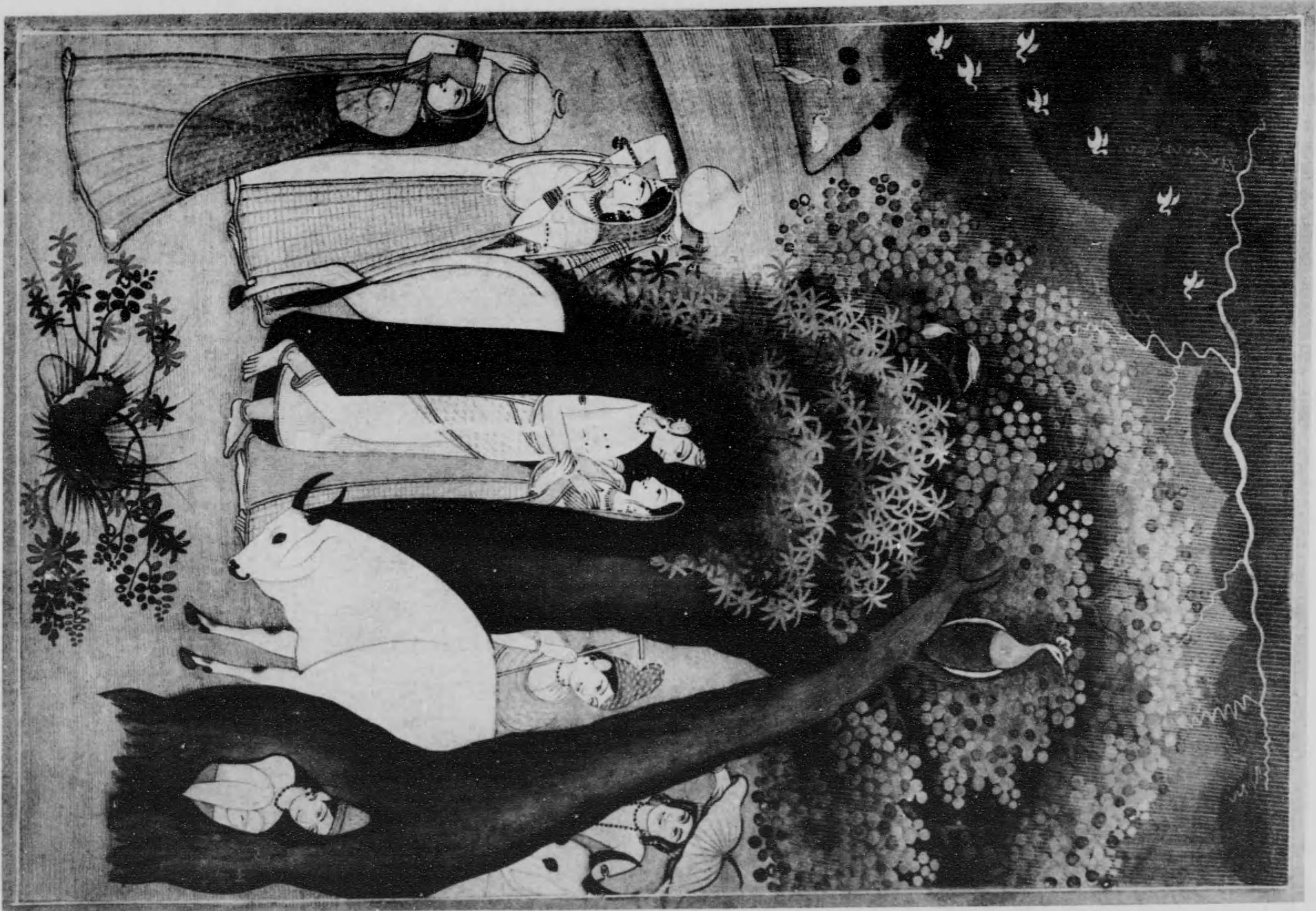
編 者 識

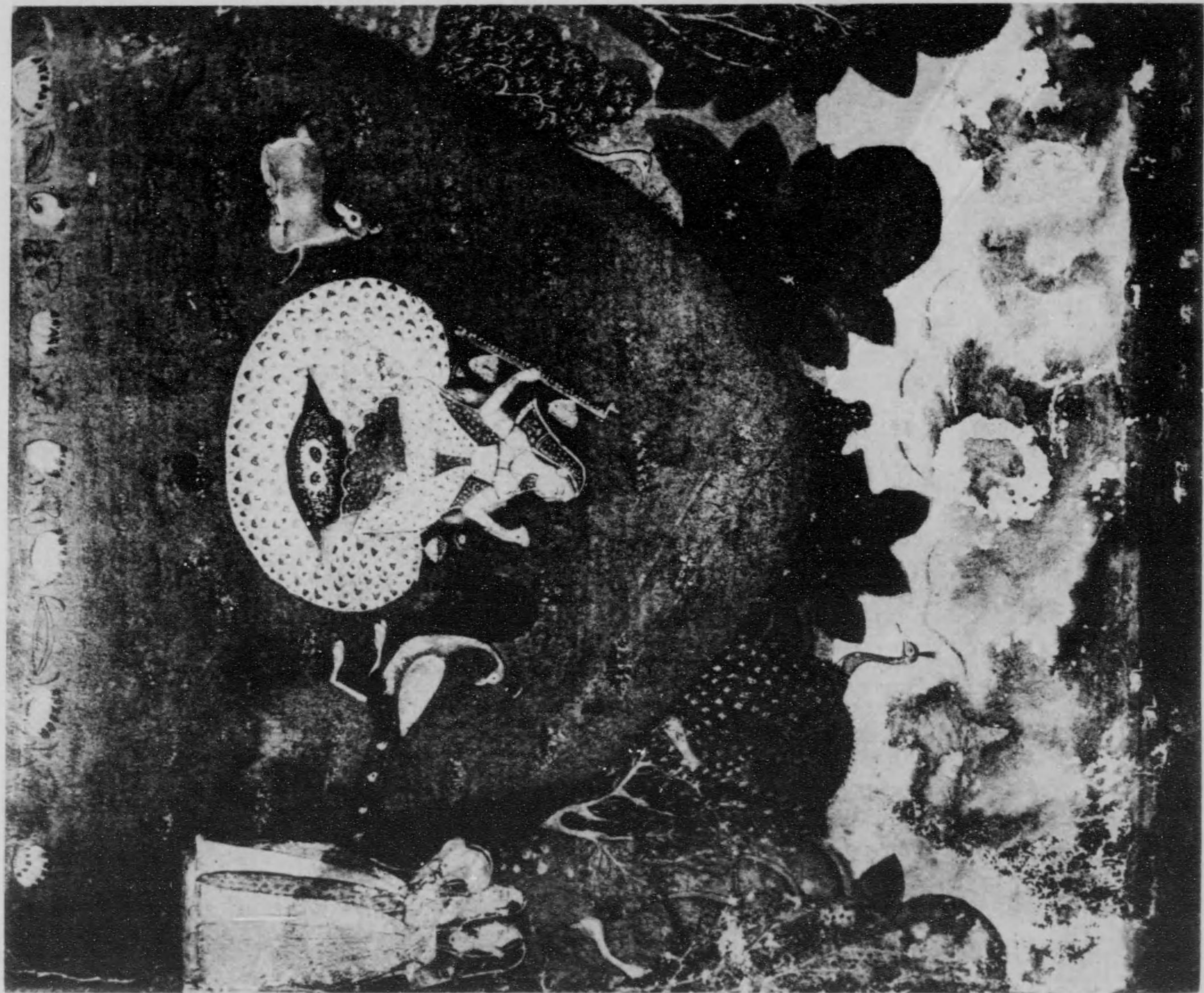
大正
 12. 3. 8
 内交

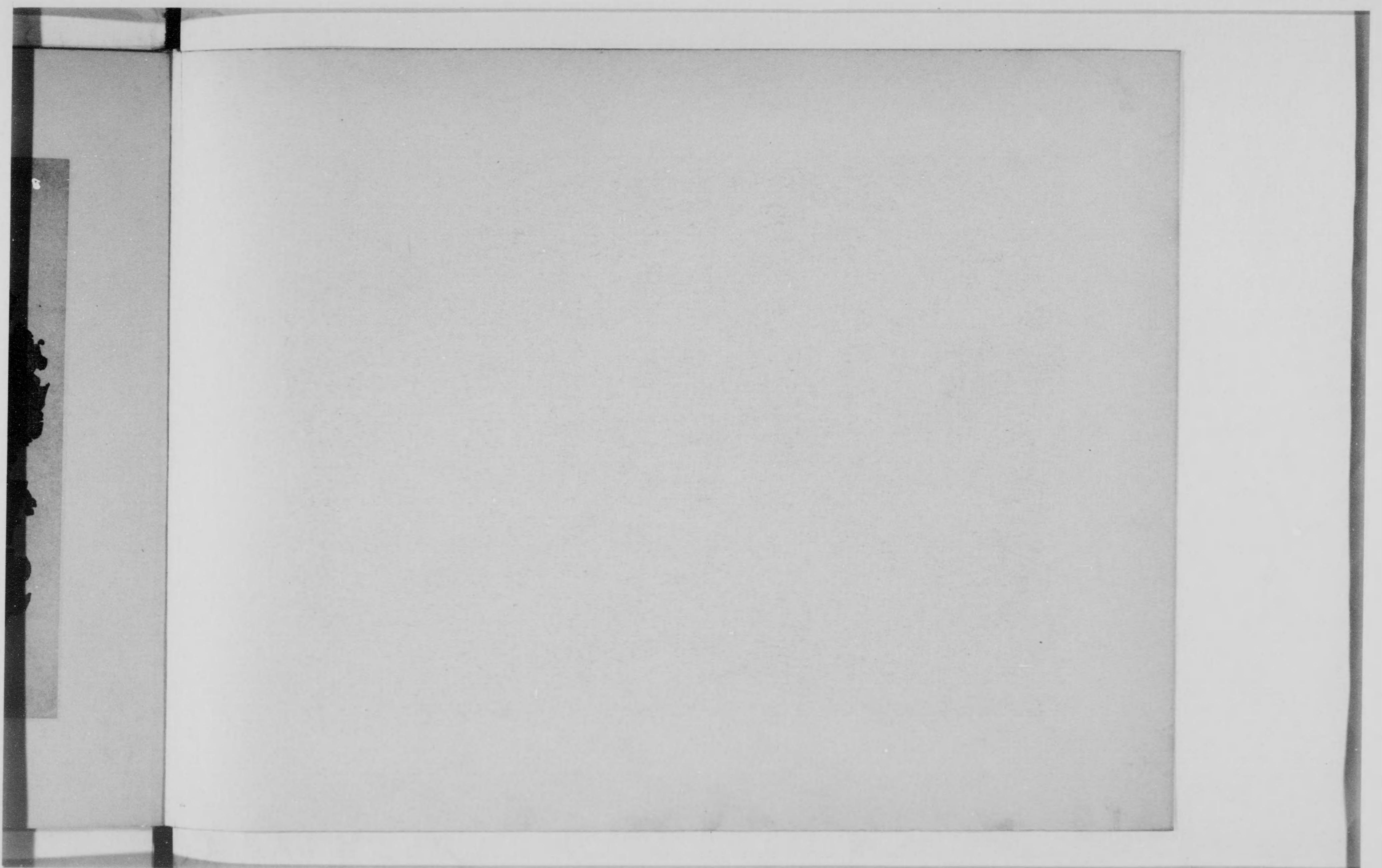


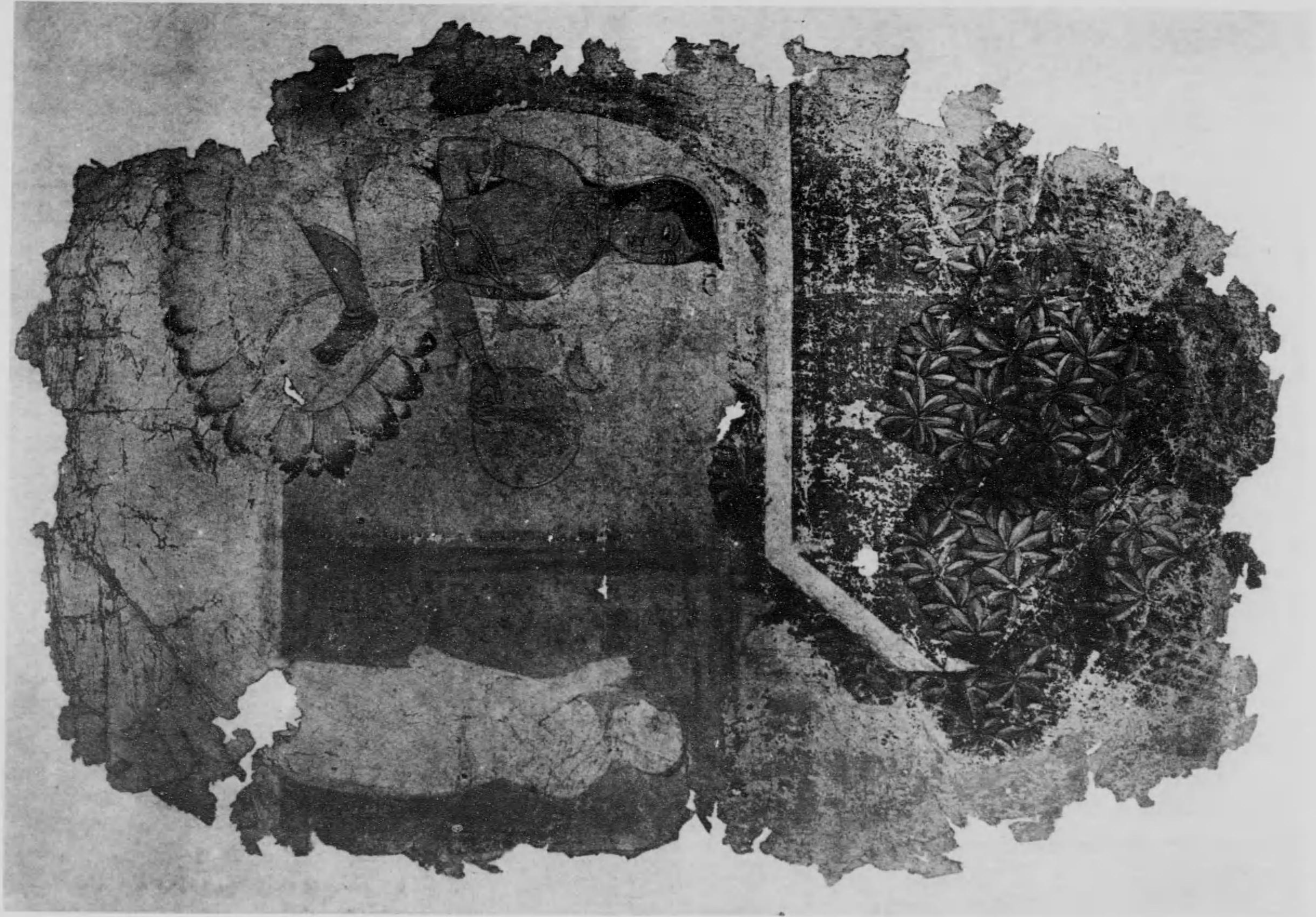


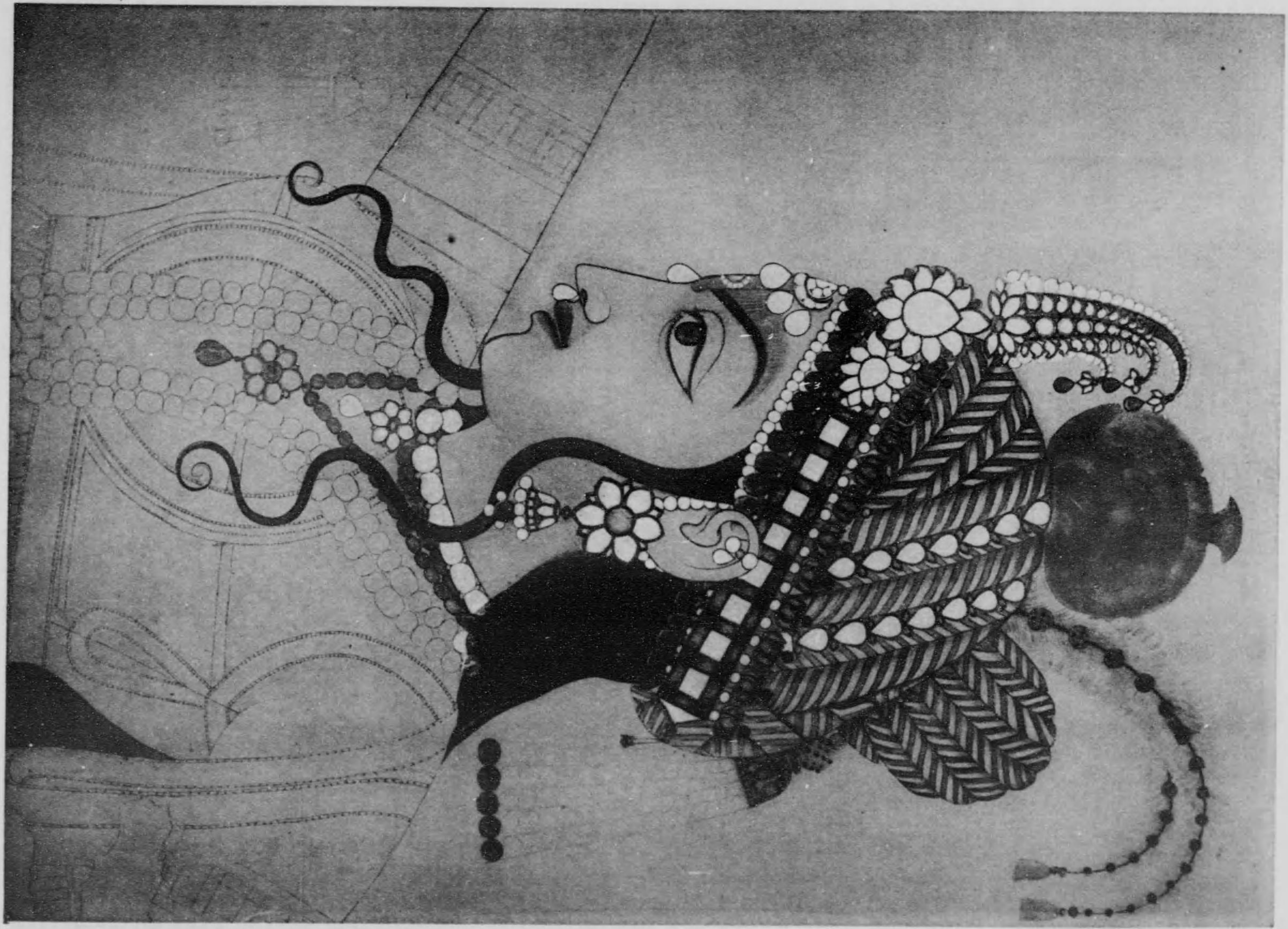


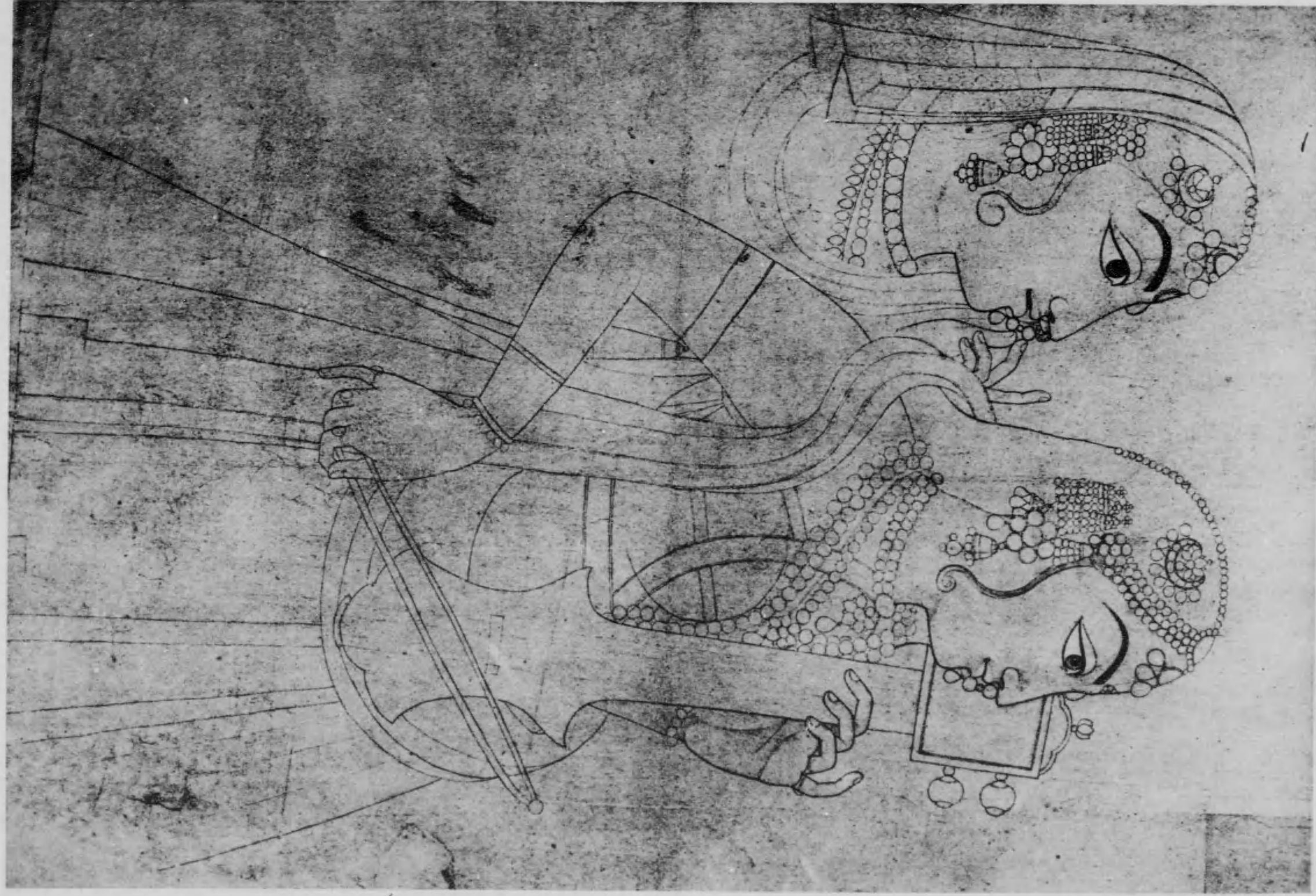






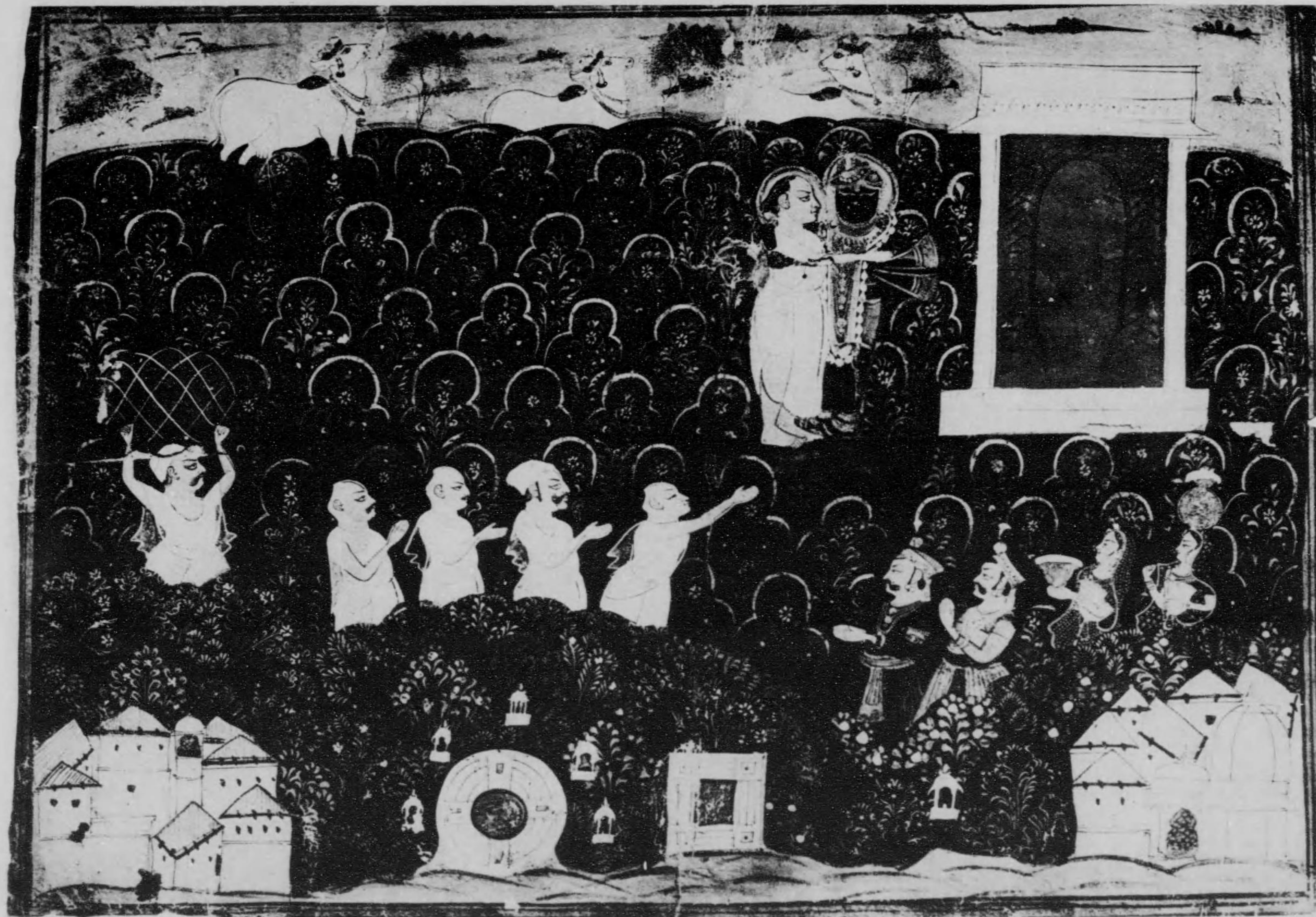






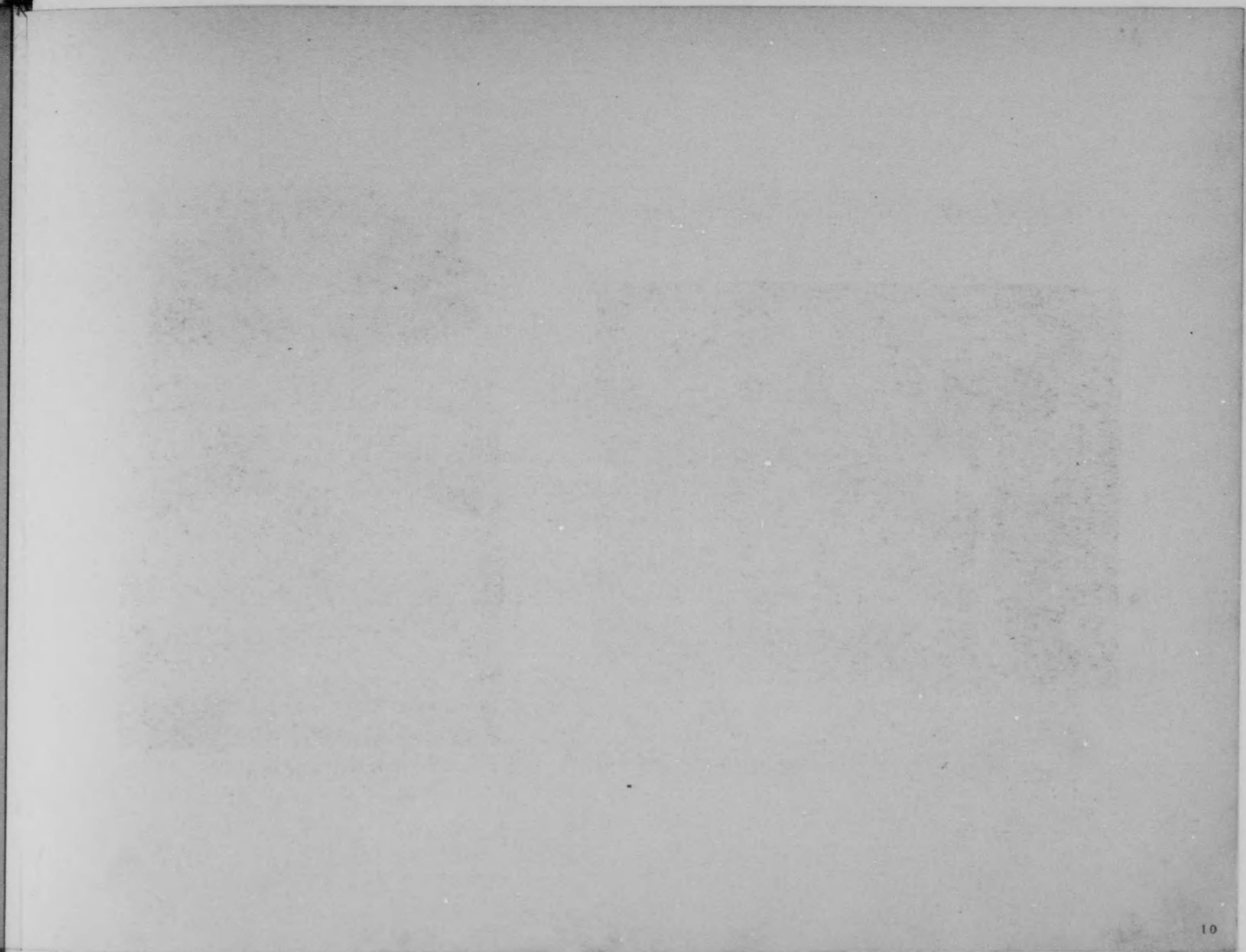


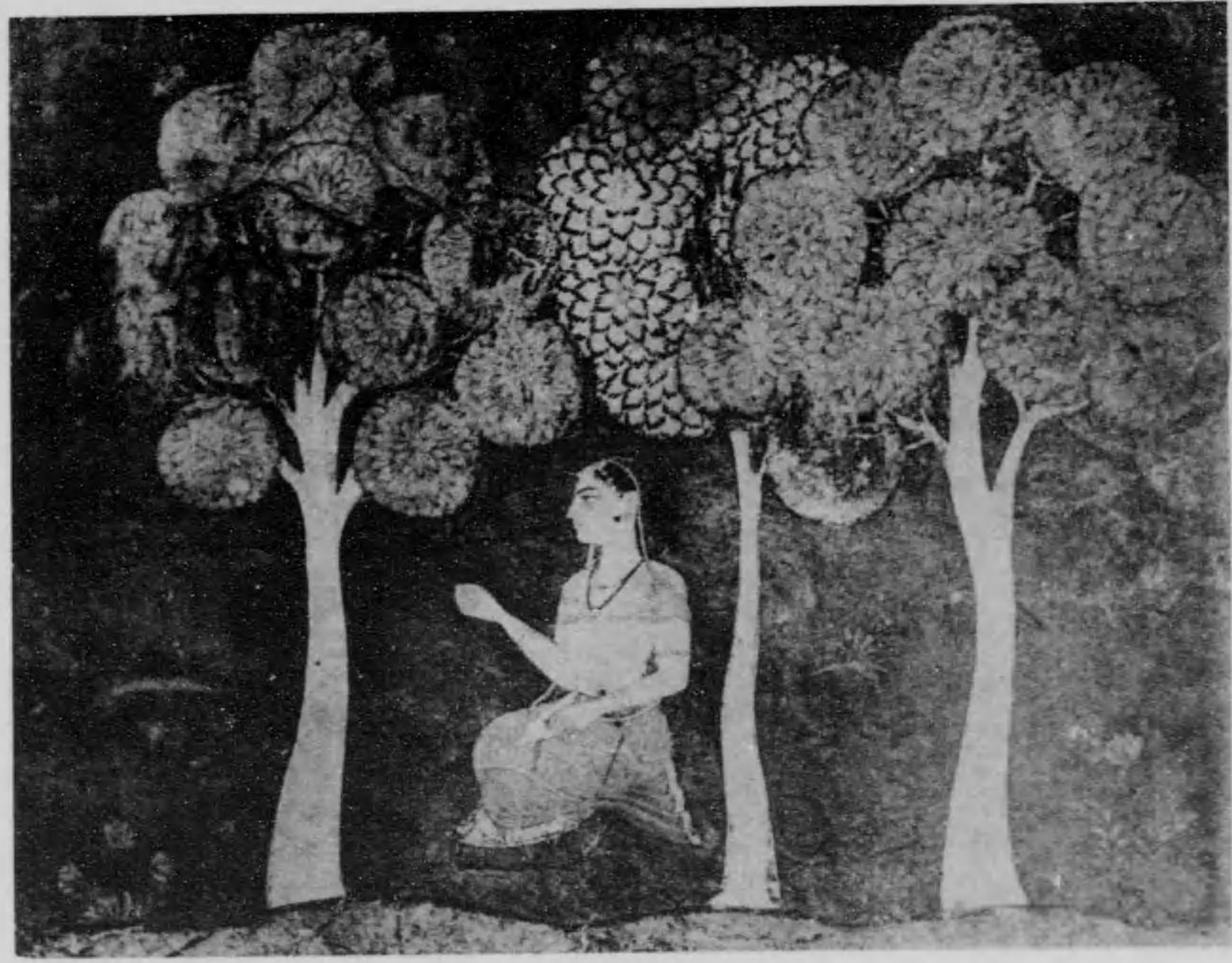












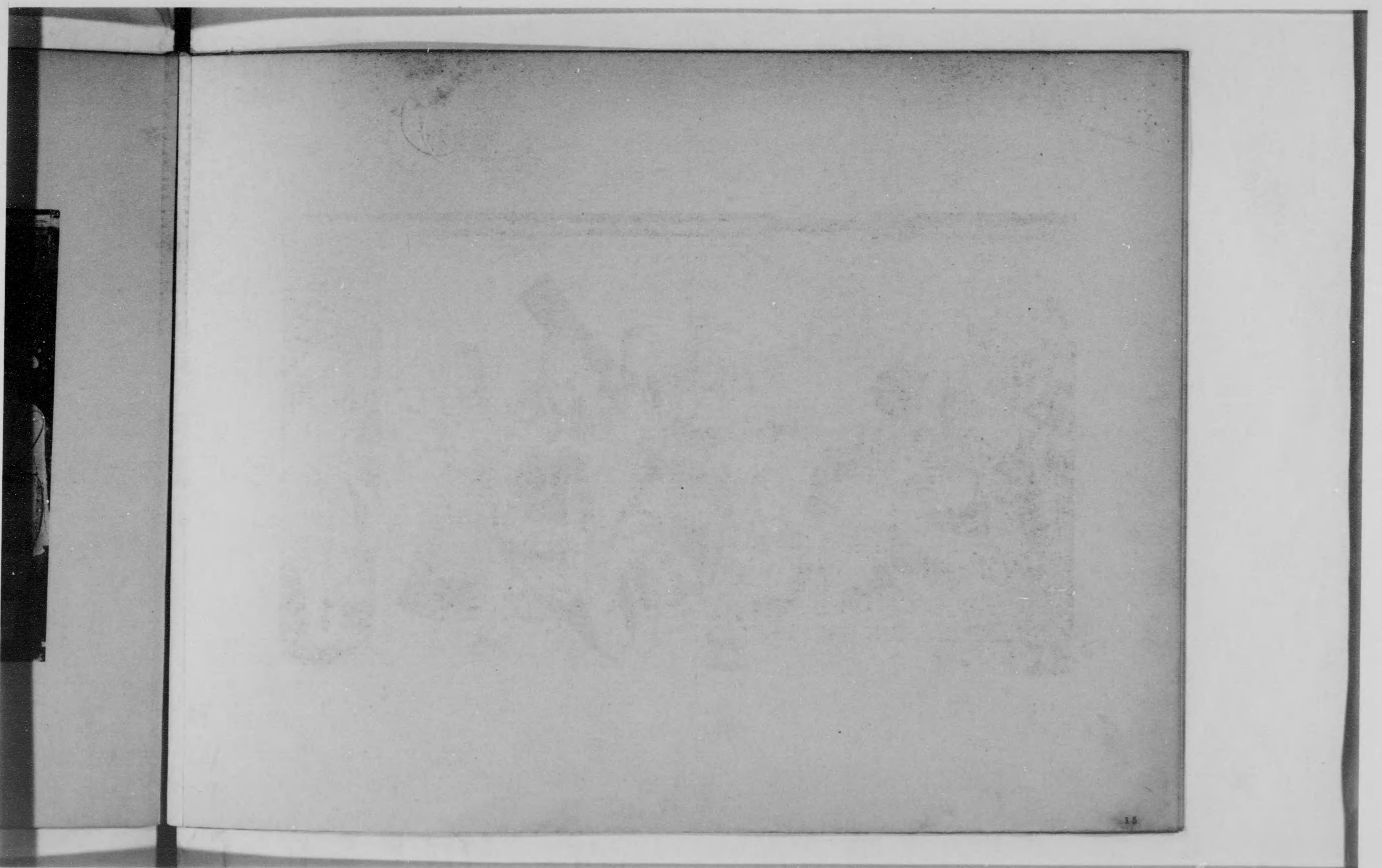










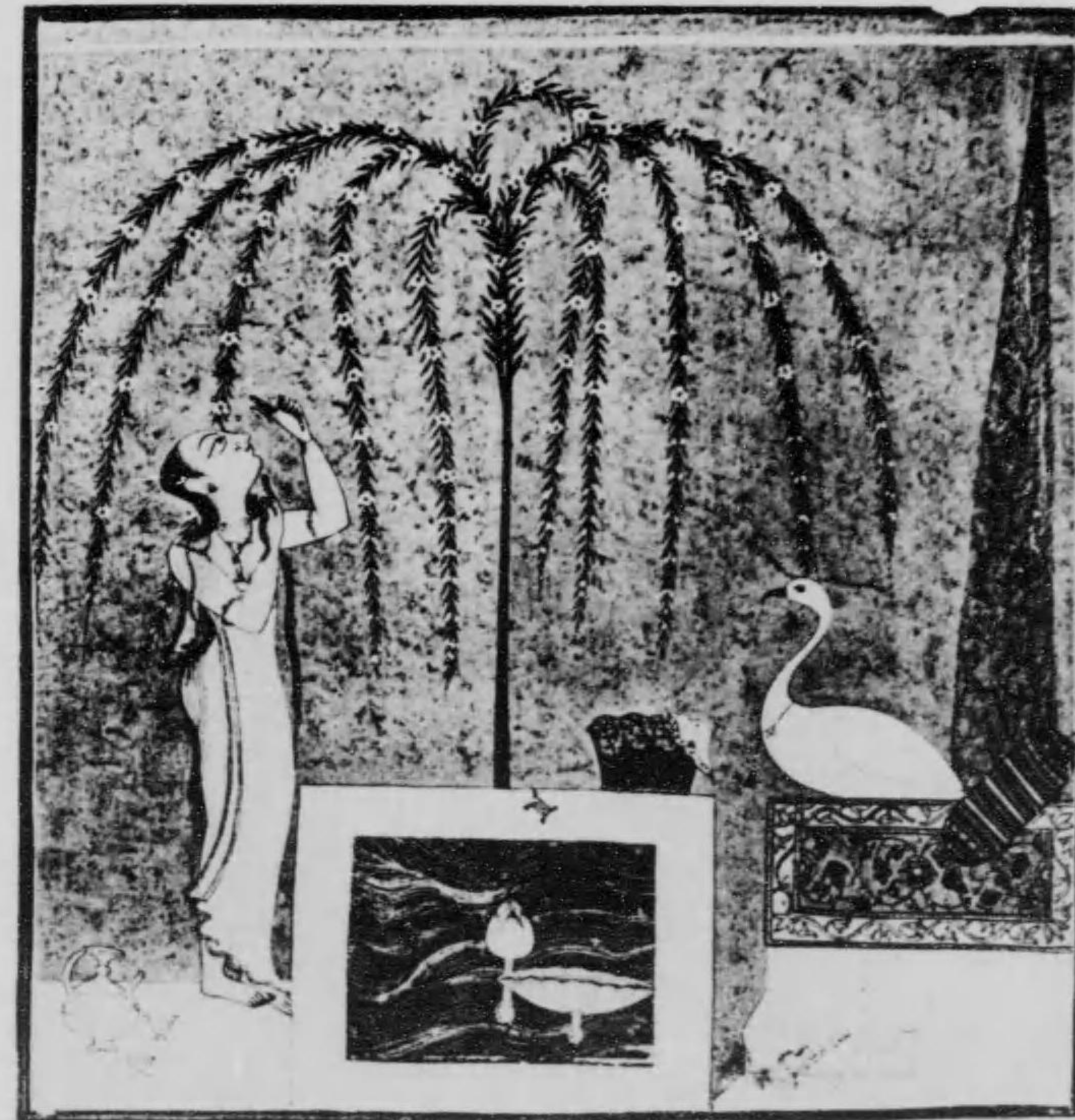


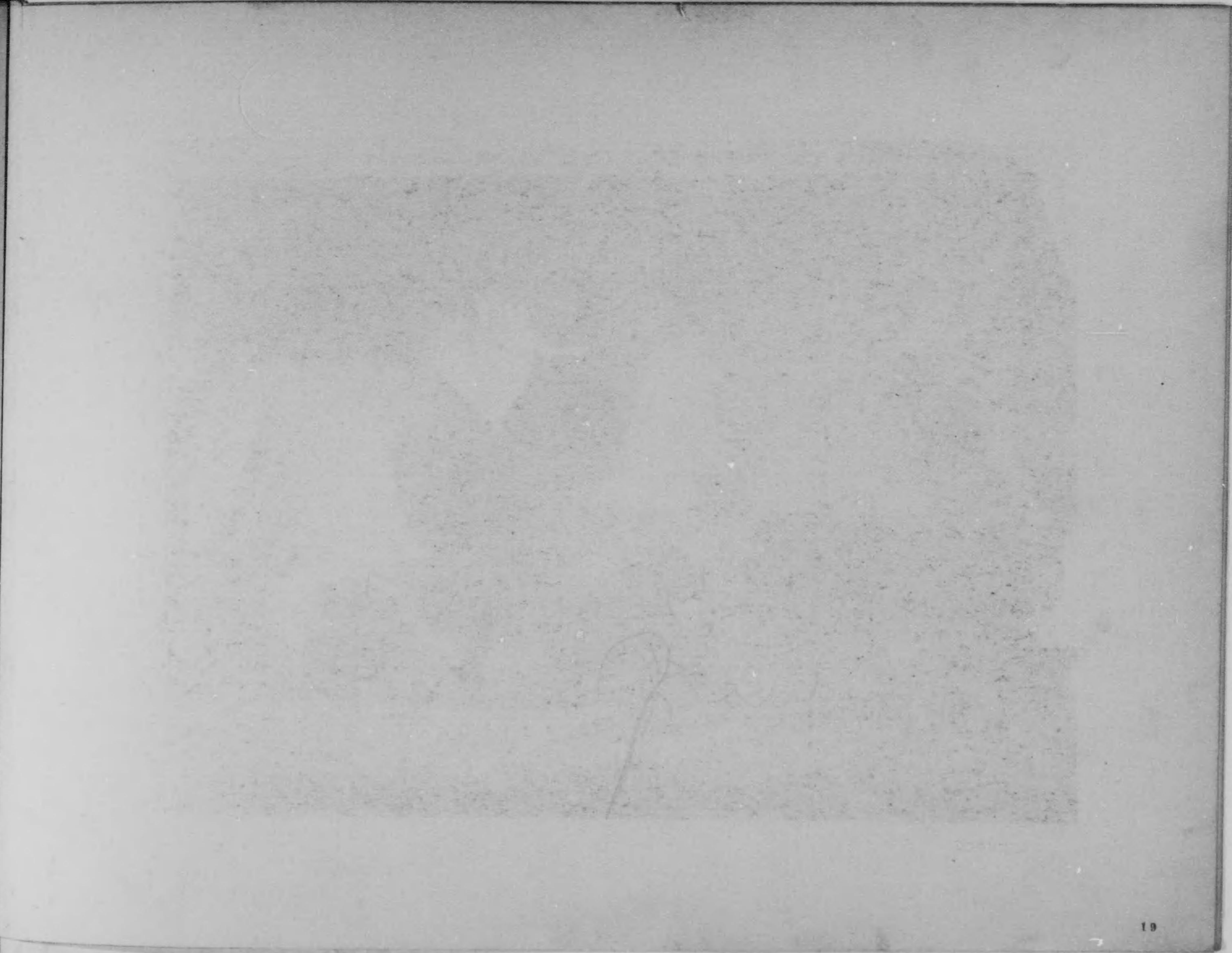




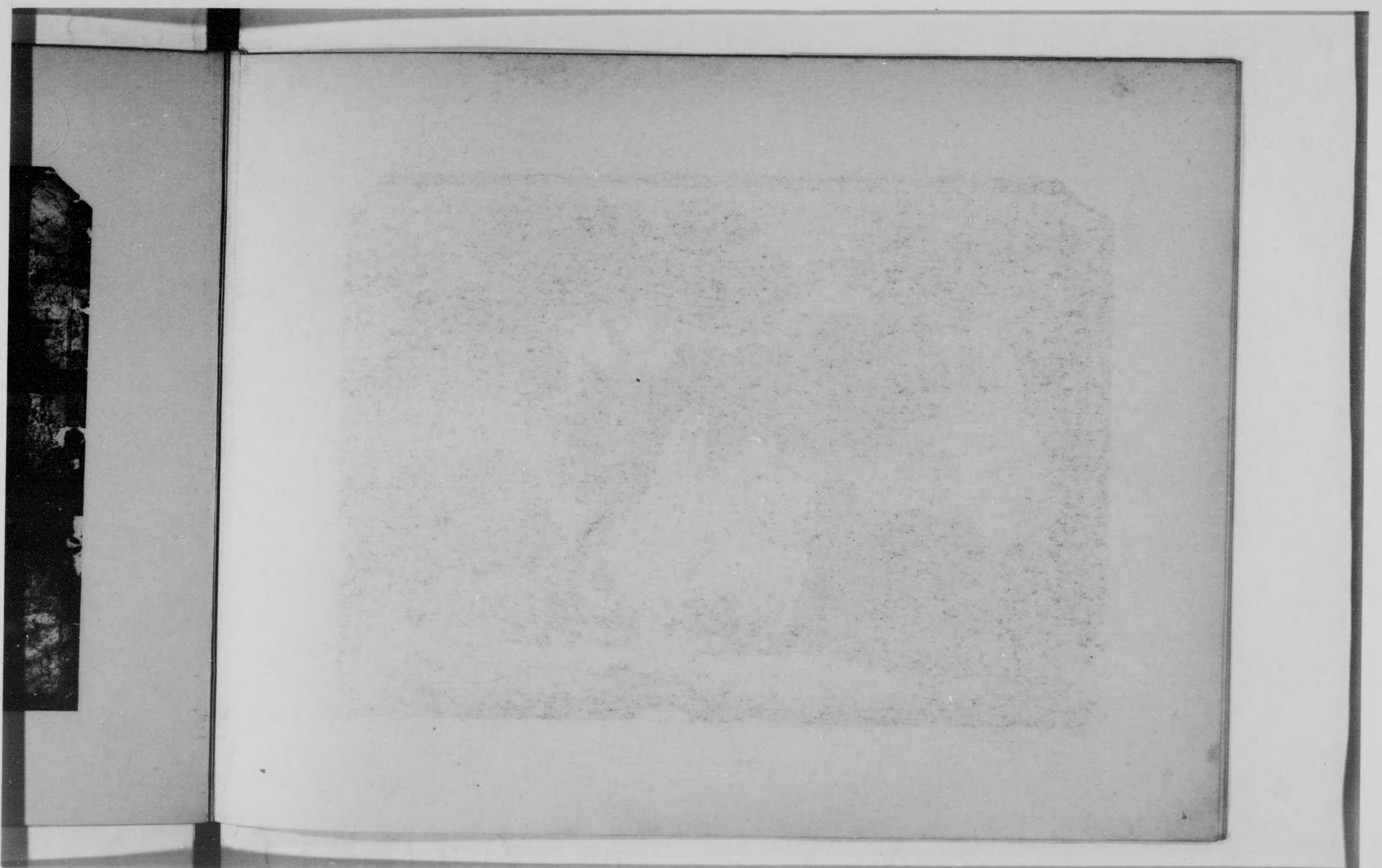


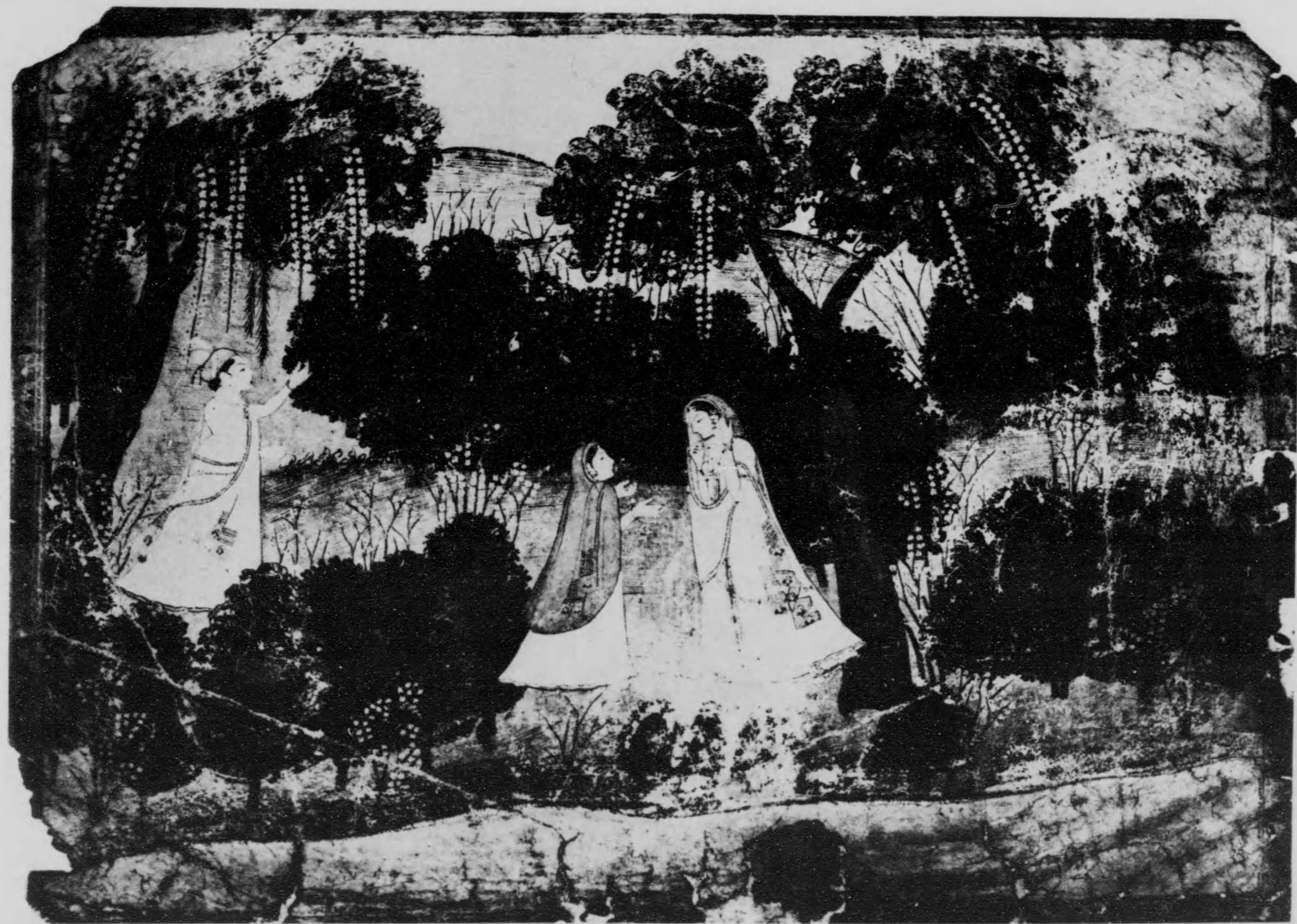


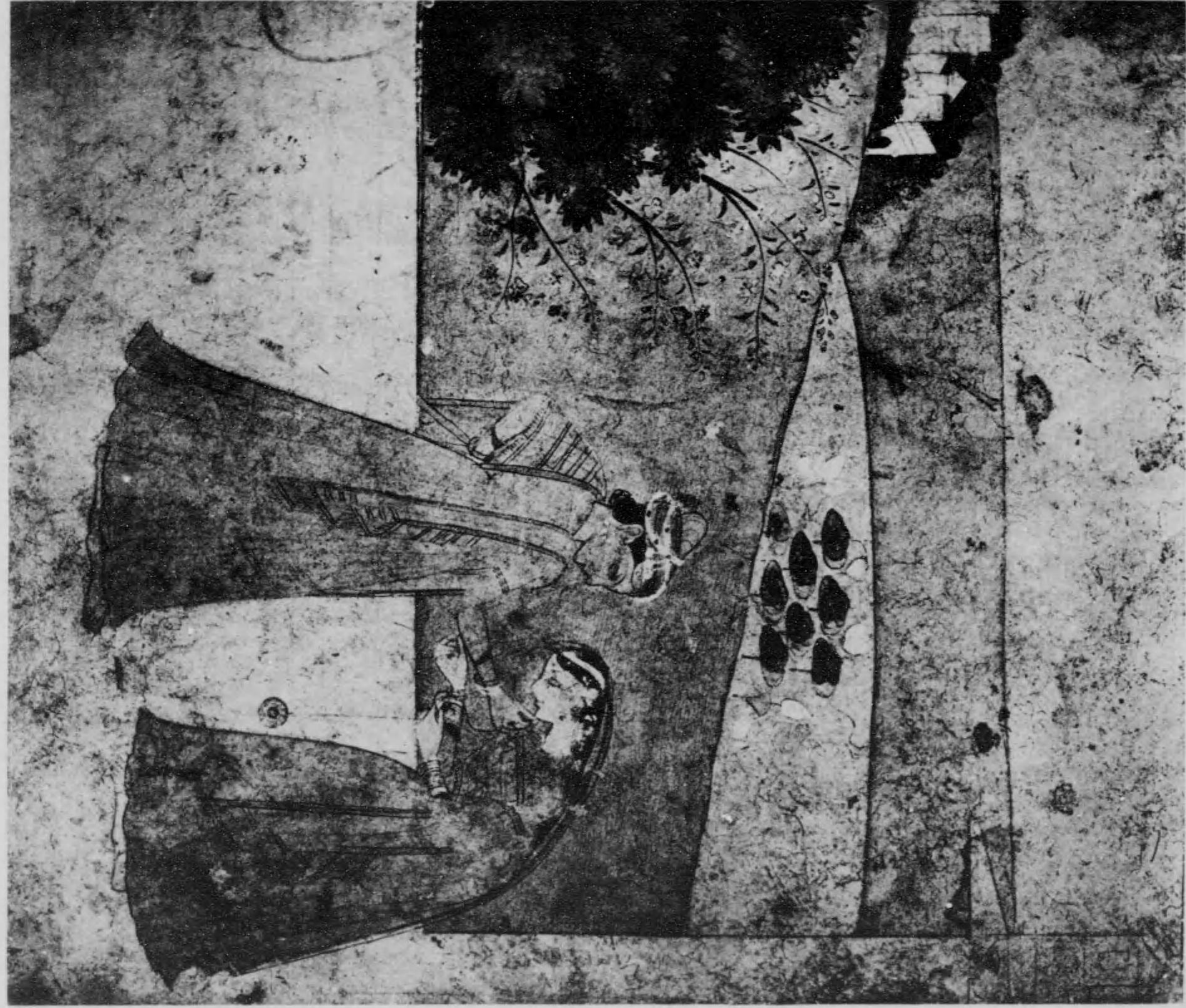


















Handwritten text in a script, possibly Devanagari, located in the top left corner of the page.

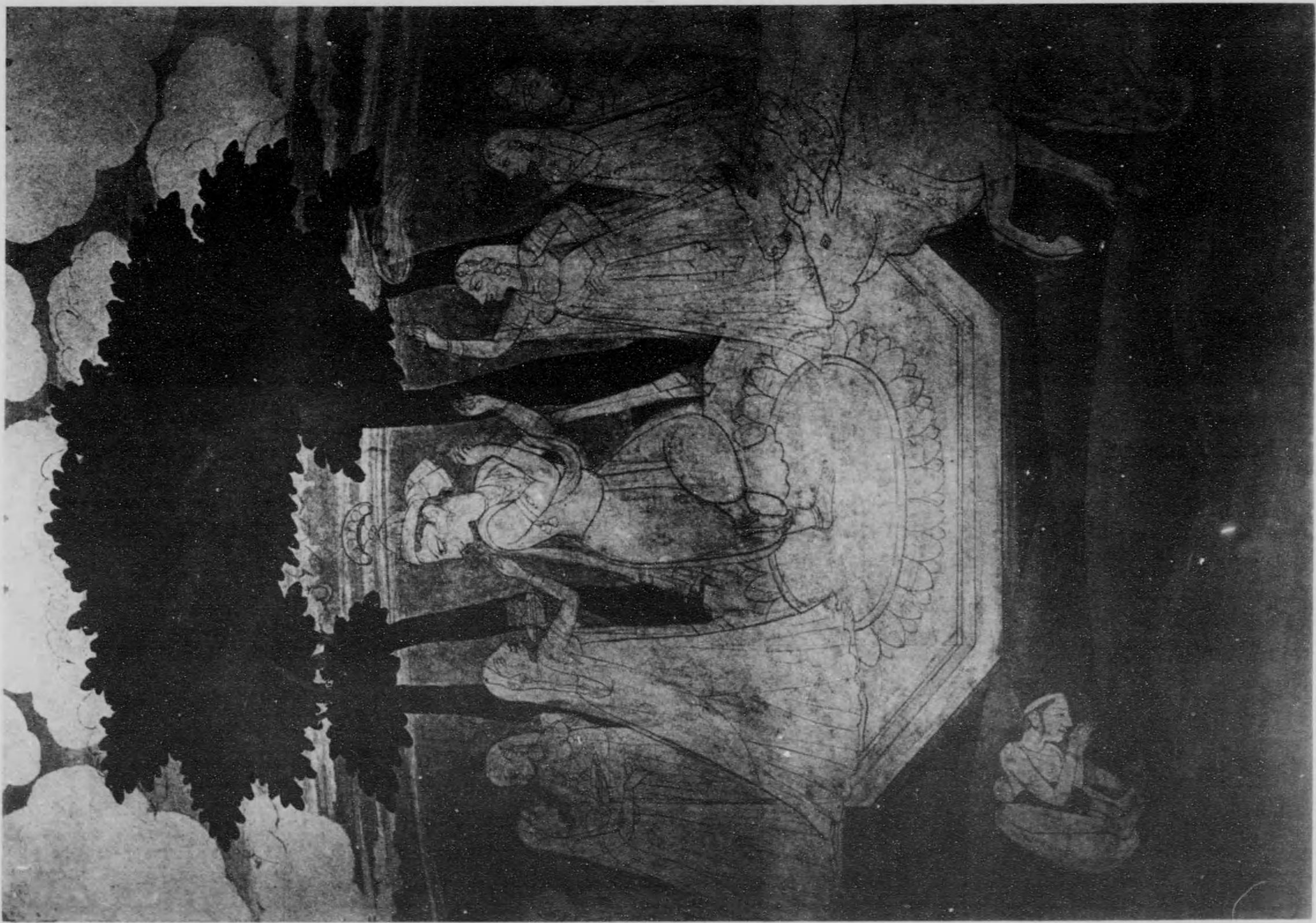


दूर हीने आबत मजबूत करीद हयरे उन मुख मोरह सिदाहिनी गली दिले पटेर है कान्हे कटाठी है सुनि लोह सुनी है जलुनी है सुनि है वें

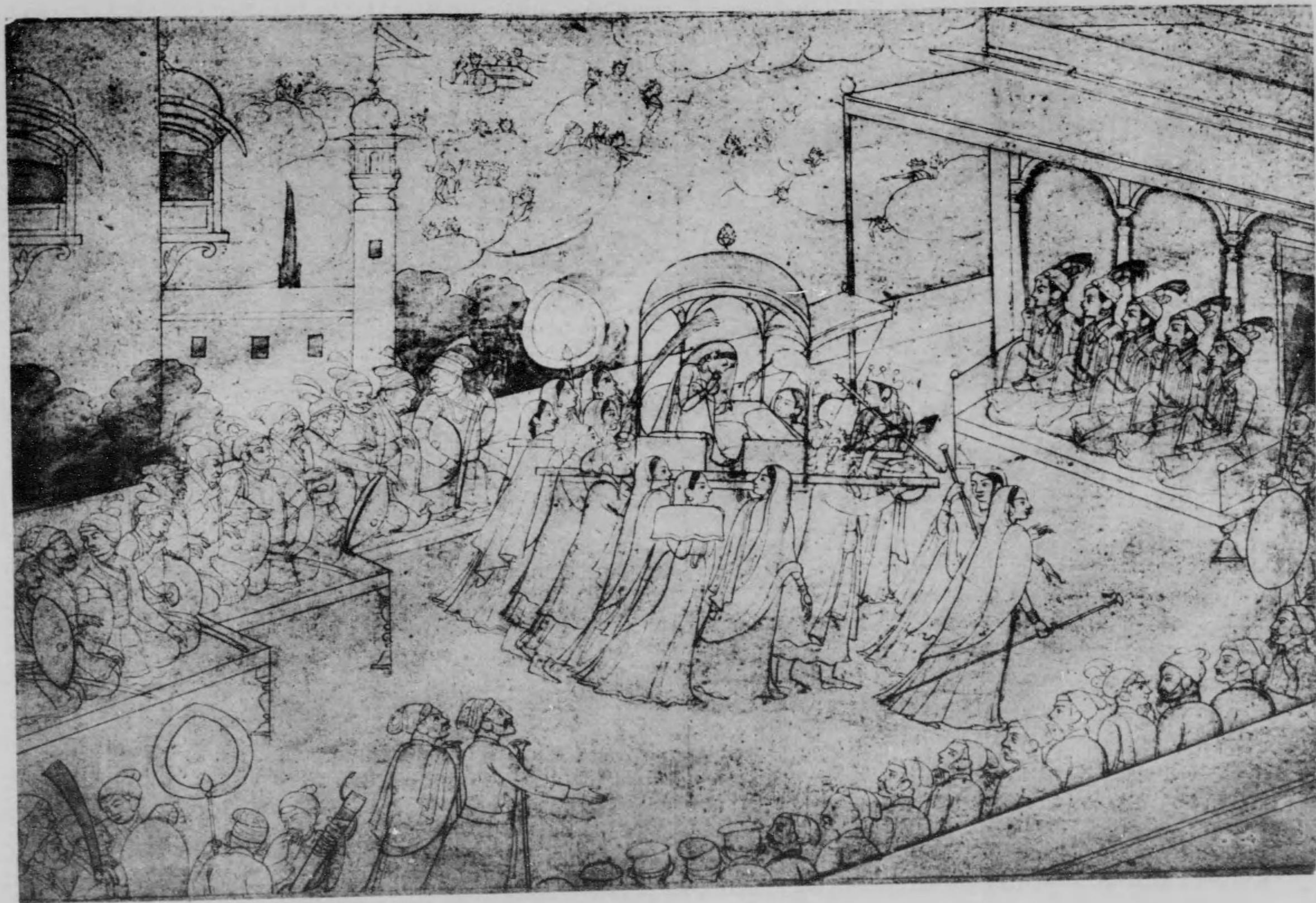




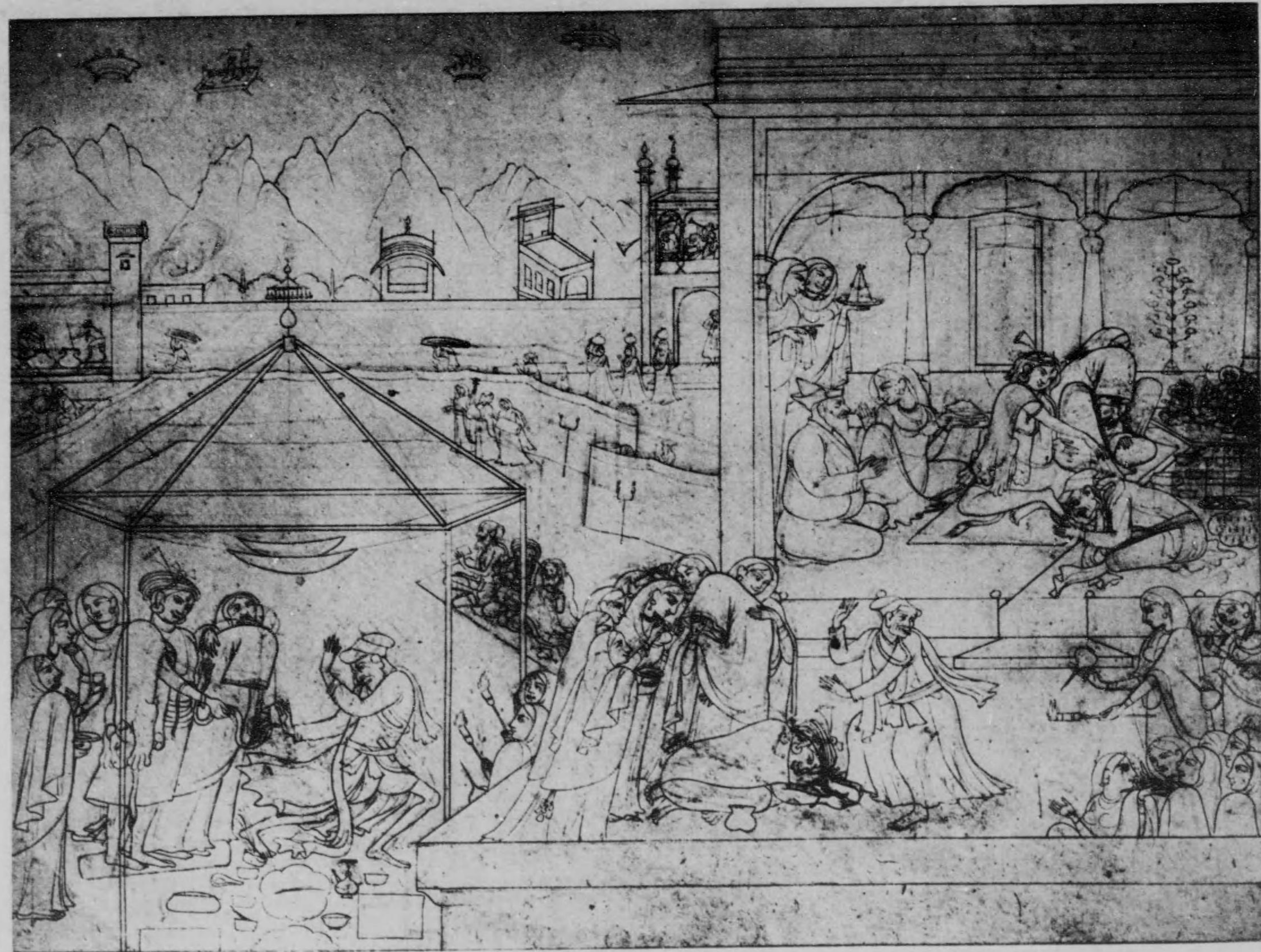






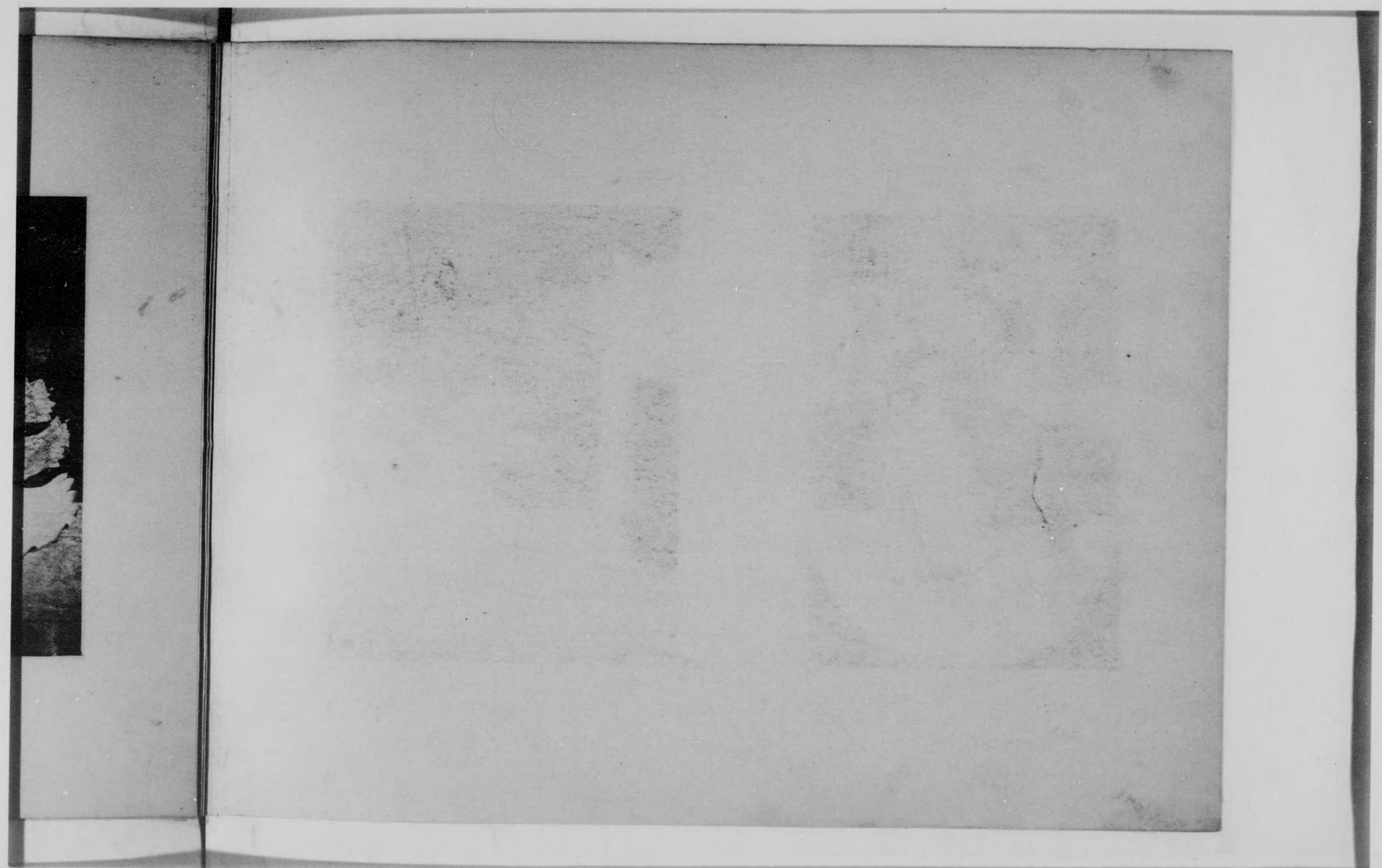




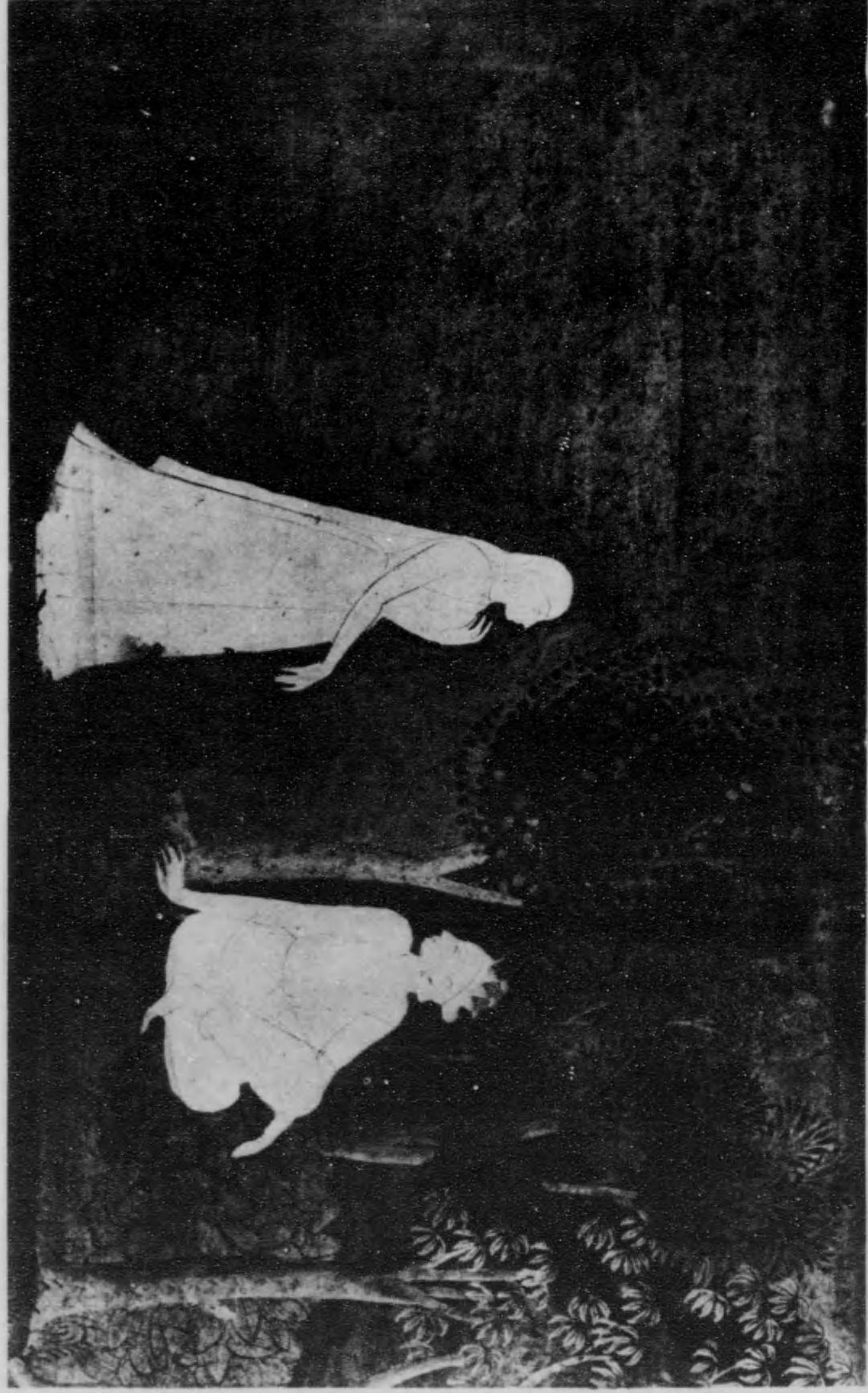














大正十二年二月十五日印刷
全年二月二十七日發行

(定價拾貳圓五拾錢)

編輯兼發行者 後藤博山

印刷者 市川營三

印刷所 京都市木津屋橋西洞院西入
市川製版所

發行所 京都市車屋町丸太町南入
平安精華社

終